



# 泗水小だより

学校教育目標「自ら考え なかまと高め合う 泗水小」



泗水小学校  
学校だより No42  
文責 芹川博文  
3月15日(金)

## それぞれの思いを語り つないでいく ～ 東日本大震災13年 当事者の思いに触れることから ～

東日本大震災から13年がたちました。あの時、私はカタールという中東の国で日本人学校の教師をしていました。ある集会に参加していましたが、隣の外国の方が携帯を見ながら、「あの、あなたの国で大変な地震が起きたらしいですよ。」と小声で教えてくれました。集会中だったこともあり、私は、「大丈夫。日本では地震はめずらしくないですから。」と答えました。

しかし、集会が終わり、帰りの車の中でつけたラジオで、緊急ニュースとして日本の地震が伝えられていました。「これは、今までの地震とは違うかもしれない」と思い、帰宅してテレビをつけると、そこには信じられない光景が映し出されていました。津波で車や家が次々と飲み込まれる映像と、それを映した方の嘆きの声。当時日本人学校には、おばあちゃんの家が仙台市にある子もいました。「日本人か。あなたの家族や友人は大丈夫か。」何人もの見知らぬ外国の方が、心配して声をかけてくれました。カタール在住の日本人の方々と、募金やチャリティーバザーを実施し、多くの方から義援金と共に励ましの言葉をいただきました。東北や九州とか関係なく日本人として、いや、日本人や外国人とか関係なく人として、その温かさがしみました。

13年たっても、あの時の記憶と思いが鮮明に残っている方も多いことでしょう。そして、今でもその喪失感と哀しみを背負って生きておられる多くの方も。今年被害を受けた能登の知り合いの方から、「あいさつが変わりました」と聞きました。「こんにちは」だったのが、「がんばりましょう」に。見ず知らずの人ともお互いに声を掛け合い、励まし合いながら共に生き抜いている人々の姿を想像します。当事者の思いに触れ、寄り添う気持ちを、子どもたちにも広げたいと思います。



当時作った募金用のパネル

## 「何もない」からこそ広がる可能性 ～ 送別遠足の子どもたちの姿から ～

遠足当時の朝、登校する子どもたちの表情、登校時間がいつもと違いました。満面の笑顔でリュックを背負ってくる子どもたちの姿を見て、遠足の持つパワーの大きさと、「学校が楽しみ」であることの大切さを再確認しました。

遊具は何もない、しかし広々としたグラウンド。何もないからこそ、無限に広がる遊びの可能性。おにごっこ、はないちもんめ(今でも健在!)、長縄やフリスビー……。どれも昭和の時代にやっていたものばかり。中にはペットボトルのキャップを指ではじいて飛ばして遊んでいる子もいました。子どもは遊びの天才。子どもの持つエネルギーと創造力をどう引き出せるか。大事なヒントを得た一日でもありました。



## 鶯(ウグイス)と猪(イノシシ) ～イノシシ対策の柵を張りながら感じたこと～

先週末は実家の菊鹿に戻って、イノシシ対策で金網張りのくい打ちをしました。山に入るとそこは別世界のような静けさ。ウグイスの鳴き声が澄んだ空気に響き渡ります。自然の中に「おじゃまします」といった感覚さえ持つほどでした。



そんな中、タケノコや栗の被害を防ぐための金網柵。さぞやイノシシも食べ物がないからなのでしょう。その原因が、もし私たち人間による環境破壊や気候変動によるものだとしたら考えものです。利便さ・快適さを追求する中で自然のバランスを崩し、結局私たち人間が「共存」を拒み「柵」を作っている感じがしました。



この作業も兄と私が「実働部隊」。両親は90歳近くになりました。特に父は膝が悪く、地面を這いながらの「現場監督」です。私たちの作業を見ながら「昔はこぎゃん仕事はなかったばってんなあ」と呟いていました。